

「イエスの十字架を囲む人々」

(ヨハネ19:17～27)

挽地茂男

2020.4.5 日本基督教団千歳丘教会

聖書がわたしたちに伝える出来事には、表面的に「見たまま」では見えない隠された真の意味があります。しかし十字架は明らかな敗北に



見えます。ロバに乗ってエルサレム入城。どこにも真の王の姿など見えません。「見たまま」では愚かで弱々しく見えるので

す。そんな愚かさと弱さとを打ち消そうとして、無理に、敗北の姿に勝利を読み、弱さに強さを読み込む。それが宗教の言葉、「負け犬(弱者)の遠吠え」に過ぎないのだ、という人もいます。しかし「遠吠え」は所詮「遠吠え」あって、人を生かす力とはなりません。パウロはこう言います。

「1:23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、1:24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者

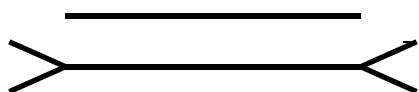
には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」。十字架は「見たまま」では愚かで弱々しく見えます。遠藤周作は幼い頃、熱心にキリスト像を拝んでいる母親を見て「お母ちゃんなんでこんな弱いおっちゃんのこと拝んではるんやろ」と思ったと書いています。しかし信じる者にとってそれは、神の力、神の知恵として経験されるのです。しかし力と知恵は隠れたままではないのです。

「見たまま」を越えた真理を表すのに、ギリシア語では「パラドクサ」〔逆説的真理〕という言葉を使います。この「パラドクサ」という言葉を手がかりとして、十字架の出来事を読んでみたいと思います。「パラドクサ」の「ドクサ」は感覚的認識、「見たまま」「聞いたまま」を意味する言葉です。それに「パラ」という言葉が頭につきます。「パラ」とは「向こう側に」とか「越えたところに」という意味の言葉です。つまり真理は「見たまま」を越えるもの、「見たまま」の向こう側にあるのです。ちょっとこの図をご覧ください。礼拝で視聴覚教材を使うのは、教会

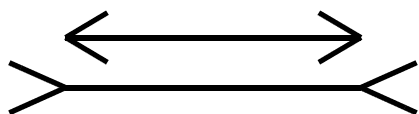
学校の授業みたいになってしまうので、抵抗がありますが、今日だけはお許しを頂きたいと思います。



ここに二本の同じ長さの直線があります。「見たまま」では同じ長さです。少し手を加えてみます。



こうすると、「見たまま」では目をごまかされてきます。「見たまま」では下の方が長く見え始めるのです。もう少し手を入れてみます。



こうなるともう確信を持って「下の方が長い」とわたしたちの頭は言い始めます。「見たまま」の限界です。「見たまま」だけで判断していると、真理には到達しないという、ギリシア哲学が到達した認識です。



真理とは、ドクサ「見たまま」を、パラ「越える」所にあるのです。「貧しい者は幸いです」とか「後のものが先になる」といった主イエスの言葉や、「子ロバに乗ってエルサレムに入城するような」その生涯の出来事や、十字架には見たままでは理解できない真理、パラドクサ（〔英〕paradox)、つまり逆説的真理が宿っています。

人々はまず、基督教の出来事を、「見たまま」「聞いたまま」の出来事として知り、それが伝わってまいります。

主イエスの十字架の出来事を伝えるユダヤとローマの歴史資料を見てみましょう。基督教の外部文章です。いずれもキリスト者ではない、歴史家や著述家の文章の中に、当時の基督教が人々の目にどう映っていたのかを見ることができます。

1世紀から2世紀にかけての「見たまま」「聞いたまま」の基督教の姿です。皆さんは基督教に対して全くの部外者という位置で基督教を眺めることが、多少難しくなっているのですが、部外者として基督教を眺めてみてください。

〔あるいは部外者として情報を聞いて下さい。〕ヨセフスという人は『ユ

『ダヤ古代誌』という紀元90年頃の本に、こう報告しています。

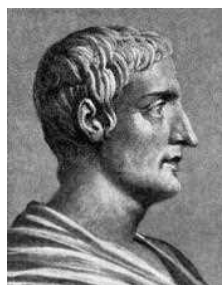


ヨセフス

「〔祭司長たち〕…はサンヘドリンの法廷を招集し、そこにキリストと呼ばれるイエスの兄弟——名をヤコブという——と他の者たちを引き出し、律法違反の罪で告発し、石打ちの刑に処せられるように引き渡した」。イエスがキリストと呼ばれていたことが分かります——わたしたちにはもう当たり前のことなのですが、信者でない人たちには、あの人たちはイエスをキリストと呼んでいる少し変わった人たち、という印象があったのでしょう。伝えられている事実は、イエスをキリスト〔メシア、救い主〕と呼ぶ宗教があったということです。そしてイエスには兄弟がいて、その人もキリスト教徒で処刑された、ということが分かります。これはキリスト者には当たり前のこと、常識的なことではありますが、キリストの出来事が社会的に認知されていくプロセスを知るという意味で大切です。

さらにローマの歴史家のタキトゥスが、『年代記』という紀元115－117年頃に書かれた本の中で、

こう報告しています。「…彼ら〔キリスト教徒〕の名前はクリストゥスに由来する。彼はティベリウスの治世に総督ポンティウス・ピラトゥスの判決によって処刑された。」キリスト教徒と呼ばれている人たちがいるが、そのキリスト教徒という呼び名は、彼らが信じている「キリスト」(クリストゥス)に由来していて、その



タキトゥス

キリストはローマ総督ポンティウス・ピラトゥスの判断で処刑されたのだ、ということがわかります。キリストの出来事が歴史の事実として、キリスト教徒でない人々に捉えられていることが大切です。「見たまま」「聞いたまま」は大切なのです。それがなければ、それを超えることもできないからです。

さらにスエトニウスという著述家が『皇帝伝』(ローマ皇帝列伝)「クラウディウス伝」(在位41年1月24日－54年10月13日)という紀元120年頃の本の中で、こう書いています。



スエトニウス

「…彼〔皇帝クラウディウス〕はローマからユダヤ人を追放した。それは彼らがクリストゥス



にそそのか
されて絶え
ず惹き起こ
した騒動の
ためであっ
た」。この

文章が面白いのは、「**クリストゥスがそそのかす**」という事態を、キリストの死後100年近く経った時点から回顧していることです。この文章は、2世紀にはキリスト教のことが公然の事実と成っていることと、そのキリスト教徒の動きを「**クリストゥスのそそのかし**」によると捉えていて、キリストの影響がキリスト教徒の今日的なリアリティとして働いているということを示しています。それが社会的には問題があるので「騒動」という言葉を使っています。こうしてキリストの出来事が歴史的な出来事として人々の通念の中に定着していったということは重要なことです。「見たまま」「聞いたまま」を超える前提が、整っていったということでもあるのです。それがなければキリストの出来事は単なる観念的な事柄として片付けることも可能だからです。しかしそれは、やはり「見たまま」「聞いたまま」のレベルを出ないということも事実です。

聖書はこのような「見たまま」「聞いたまま」を超えていきます。キリスト教の信仰のリアリティ、「**クリストゥスのそそのかし**」の世界に足を踏み入れているからです。福音は、キリストの出来事がわたしたちにとって、また人類にとってどのような大切な意味を持っているかを伝えるのです。では、今日の十字架の場面を見てみましょう。17節。

19:17 イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。

十字架への道行きの場面ですが、主イエスの行動が動詞の能動形を使って描かれます。受刑者が政治権力が差し向けた兵士にこづかれるようにして、刑場に受動的に引かれていく姿ではなく、十字架への道行きを受動的ではなく、能動的に (ἐξῆλθεν εἰς τὸν λεγόμενον Κρανίου Τόπον) 描きます。主「**イエスは、自ら十字架を背負い…〔刑場に〕向かわれた**」

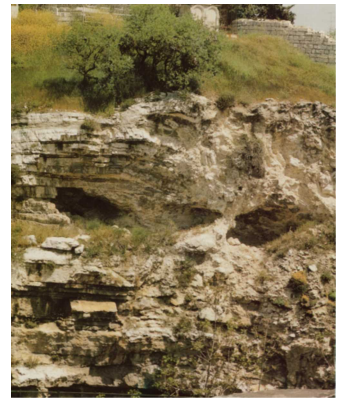


のです (v. 17)。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ9:23)と主イエスが言われたように、十字架を負うという行為を主体的な、能動的な行為として描くのです。向かわれたのは、「いわゆる『されこうべの場所』、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所」(v. 17)とされています。場所については諸説あり、はっきりとは分かっていないのですが、代表的なのが、現在のエルサレム市内(城内)の聖墳墓教会(前頁地図)のある場所がゴルゴタの丘だったと言われています。もう一つの代表が城外の「園の墓」付近をゴルゴタ(カルヴァリ)の丘(下写真)とする説があります。この「園の墓」近くのゴルゴタの丘は、見る角度によると本当に「されこうべ」(髑髏)に見えます。〔「野のゆり」2017年イースター号の十時先生の文章を読んでくださ



い。〕いずれにせよ「されこうべ」は十字架の死をイメージとして強調しています。

「19:18 そこで、**彼らはイエスを十字架につけます。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけます** (v. 18)。主イエスが「**真ん中**」の位置に置かれるのは、ピラトが十字架上に掛けさせた「罪状書」の「**ナザレのイエス、ユダヤ人の王**」と関係していると思われます。〔ピラトが王は真ん中にするのが当然だと命じたかもしれせん。〕この罪状書と訳されている言葉ティトス(τίτλος)は、英語では「タイトル」(title)という言葉で、もともと「罪状書」という意味はありません。「称号」という意味です。ピラトはイエス〔のために王〕の称号を掲げさせたのです。〔福音書の十字架の場面にこの言葉が使われているために、新約ギリシア語の研究者が「罪状書」という訳語を辞書の意味として採用したのです。ここは「称号」と読まなければなりません。〕ピラトはユダヤ教宗教指導者の愚行を、「自分たち



ゴルドンのカルヴァリ(髑髏に見える)

INRI

の王を磔にするような愚行」と皮肉を込めてこの「称号」を掲げさせたのかも知れませんが、いずれにせよ、このローマ総督ピラトの掲げた罪状書は、今、王であるダビデの子が十字架上に即位したことを宣言します(v. 19)。凄惨な即位の場面です。

ユダヤ人の祭司長たちはピラトにクレームをつけます。『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください(v. 21)。罪状書だったらこんな要求はしません。祭司長たちにとってイエスは、「ユダヤ人の王」——王つまり旧約聖書の伝統に従えば、油注がれた者、メシア——を詐称した男に過ぎないのです。ユダヤ人たちにとっては、神殿経済共同体を混乱させる「不逞の輩」としか見えなかったのです。しかし、ピラトは「ユダヤ人の王」で良いと判断を下すのです。この王とは見えない真の王の生涯を、福音書は描くのです。洗礼の際に天から下った神の声は、「これはわたしの愛する子。今日わたしがあなたを生んだ」と、詩編2編7節の王の即位の詩編を使って、神の子である王の登場を描きます。さらに主イエスの変容の山上でも同じ神

の声が響きます。「これはわたしの愛する子。これに聞け」(マルコ9:7)。そしてエルサレム入城。ダビデの子(王)が自分の玉座のある^{みやこ}城市にやっ
てこられたのです。これら一連のキリストの出来事が茶番にしか見えないのが、わたしたちの限界であり、もっと言えばわたしたちの罪なのです。十字架に挫折しているのは「神の子」ではなく、「わたしたち」なのです。人間なのです。人間の知恵であり、人間の宗教であり、人間の正義であり、人間の平和なのです。

この「ユダヤ人の王」の称号(罪状書)は「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれてい」たと記されています(v. 20)。この「ユダヤ人の王」がただユダヤ人だけの王として留まらないことを暗示します。ヘブライ語のほかに当時の世界言語(公用語)であるラテン語(政治の公用語)とギリシア語(生活の公用語)で書かれているのです。

ピラトは祭司長たちの要求を拒絶します。「わたしが書いたものは、



書いたままにしておけ」(v. 22
ἀπεκρίθη ὁ Πιλάτος, "Ὁ γέγραφα,
γέγραφα. [(直訳)「私が書いたもの

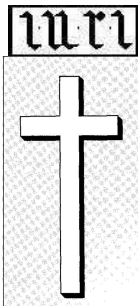


は、私が書いたのだ」[文句があるか]
=ローマ総督の権威の主張]

ピラトはユダヤ人たちの要求を拒絶することによって——実質的に——イエスを王だと断言します。

聖画でよく目にする INRI は Iesus Nazaraeus Rex Iudaeorum の頭文字を取ったもので、ラテン

語で「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」を意味します。ユダヤ人たちは、「ユダヤ人の王」という称号を鼻で



笑いながら、王様もどきのイエスの死(十字架)で一切の面倒は片がついたと思います。しかし、今、救いが完成されようとしているのです。聖書はドクサからパラドクサを指さします。[表面的に] 見えているものから隠れているものに、見えているものの向こう側へと向かうのです。

ドクサ「見たまま」は3人の犯罪者の処刑が進行し、その中の1人のちょっと変わった受刑者に特別に罪状書(称号)が掲げられています。この見

世物もそろそろ終わりに近づきました。しかし犯罪者が処刑されている表面の向こう側、パラドクサは、皮肉な罪状書と裏腹に、そこには真の王が十字架に即位していくプロセス、聖書が



成就していくプロセスが進展しているのです。イザヤ書の「苦難の僕の歌」を重ねて見ましょう。リアリティを感じるでしょうか。イザヤ書53章3-12節。圧縮して読みます。

53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。53:5 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。53:6 わたしたちは羊の群れ／道を誤り、

それぞれの方角に向かって行った。
そのわたしたちの罪をすべて／主は
彼に負わせられた。53:7 苦役を課
せられて、かがみ込み／彼は口を開
かなかった。屠り場に引かれる小羊
のように／毛を切る者の前に物を言
わない羊のように／彼は口を開かな
かった。53:8 捕らえられ、裁きを
受けて、彼は命を取られた。彼の時
代の誰が思い巡らしたであろうか／
わたしの民の背きのゆえに、彼が神
の手にかかり／命ある者の地から断
たれたことを。53:9 彼は不法を働か
ず／その口に偽りもなかったのに…
53:10…彼は自らを償いの献げ物と
した。…主の望まれることは／彼の
手によって成し遂げられる。53:11
彼は自らの苦しみの実りを見／それ
を知って満足する。わたしの僕は、
多くの人が正しい者とされるために
／彼らの罪を自ら負った。53:12 そ
れゆえ…彼は戦利品としておびただ
しい人を受ける。彼が自らをなげう
ち、死んで／罪人のひとりに数えら
れたからだ。多くの人を過ちを担い
／背いた者のために執り成しをした
のは／この人であった。

福音書記者は目の前のドクサにし
か興味のない兵士たちの行動をとら
えて、それを示します。兵士たちは、

ただ自分たちの私欲のために行動し
ます。23－24節。「19:23 兵士
たちは、イエスを十字架につけてか
ら、その服を取り、四つに分け、各
自に一つずつ渡るようにした。下着
も取ってみたが、それには縫い目が
なく、上から下まで一枚織りであっ
た。19:24 そこで、「これは裂かな
いで、だれのものになるか、くじ引
きで決めよう」と話し合った。」

彼ら（兵士たち）はまるでハイエナ
です。猛獣の残した獲物に群がるハ
イエナやハゲタカのようなのです。人間
の力や権力は、自らの欲望・欲求を
満たすために使われるのが常なので
す。「天下を取る」という行為の末
端部では(末端にぶら下がっている
者たちにおいては)、その行為が、
人の所有物や財産に対する実に横柄
で下品な態度として現れることがあ
るのです。兵士たちは小さな私欲に
駆られて、下着までくじ引きにしま
す。しかし同時に、**預言が成就して
いくのです**(V.24)。24節b。「そ
れは、『彼らはわたしの服を分け合
い、わたしの衣服のことでくじを引
いた』という聖書の言葉が実現す
るためであ





った。兵士たちはこのとおりにしたのである。」預言の言葉は詩編 22 編 19 節のことばです。

今日読んだ交読詩編の言葉です。18－20 節をもう一度読みます。

「22:18 骨が数えられる程になったわたしのからだを／彼らはさらしものにして眺め 22:19 わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く。22:20 主よ、あなただけは／わたしを遠く離れないでください。わたしの力の神よ／今すぐにわたしを助けてください。」まるで神も存在しないかのような、悪徳の勝利が目の前に展開します。しかし「見たまま」（悪の勝利）は神によって超えられているのです。人々の悪は、神にあっては悪として完結しないのです。為政者の悪行、その権威を執行する者の悪行、それを傍観する者の悪行も、それは悪行であると同時に単なる悪行ではないのです。

今見ましたように主イエスの死は、すべて聖書の実現〔預言の成就〕として捉えられています。今日の範囲を超えて、すこし先まで見ておきましょう。28 節。「19:28 この後、

イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した（τελειωθῇ ἡ γραφή）。」30 節。「19:30 イエスは、このぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』（τετέλεσται）と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」聖書の言葉が成し遂げられた、聖書が実現したという意味です。36 節。「19:36 これらのことが起こったのは、「その骨は一つも砕かれない」という聖書の言葉が実現するためであった。19:37 また、聖書の別の所に、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」とも書いてある。」1 人（3 人）の犯罪者の処刑が進行していくプロセス（ドクサ）の中で、神の言葉が成就していくプロセス（パロドクサ）が現実のものになっていきます。福音書記者はそう捉えるのです。

さて、このヨハネによる福音書には、他の福音書にはない唯一暖かい感情が漂っている場面があります。母と子の今生の（十字架の）別れの場面です。25－27 節。「19:25 イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。19:26 イエスは、母とそのそばにいる

愛する弟子とを見て、母に、『婦人よ、御覧なさい。あなたの子です』と言われた。19:27 それから弟子に



言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自

分の家に引き取った。」主イエスの十字架のそばに立っている人たちがいます (εἰστήκεισαν δὲ παρὰ τῷ σταυρῷ τοῦ Ἰησοῦ)。5人の人たちです。主イエスの母と、その母の姉妹と、クロエの妻のマリアと、マグダラのマリア、そしてイエスの愛された愛弟子の5人です。彼らは十字架上で引き裂かれていく我が子を見つめながら、また字架上で引き裂かれていく我が師を見つめながら、心は張り裂けていたのです。

そのとき主イエスの口から母に向かって言葉が発せられます。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」

(v.26)。ここにどんな空気を想像すればいいのでしょうか。息子を失っていく母に、息子の代わりが指名されます。母はそれで安心した、でしょうか。また愛弟子に向かってもこういわれます。「見なさい。あな

たの母です」(v.27)。そして福音書は「そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った」と、一件が落ち着いたと語ります。ここにはもう少し掘り下げが必要です。この物語は、母を最後まで思いやるイエスの単なる「親孝行物語」以上のものがあります。またイエスの母親を引き取る愛弟子を称える、心優しき「愛弟子物語」以上のものがあります。ここにはイエスの苦しみを媒介にした、魂の交流があります。今、十字架の苦しみを目の当たりにする母と弟子の心を、張り裂けんばかりの悲しみと苦しみが占領しています。その悲しみと苦しみが心を占領する時、母と弟子の悲しみと苦しみは同化し始めます。苦しむイエスを目の当たりにしながら、苦しむ母と、苦しむイエスを目の当たりにしながら、苦しむ弟子の間に悲しみと苦しみが共有されていきます。その時、主イエスのゆえに苦しむ母を自分の母として、主イエスのゆえに苦しむ弟子を自分の子として受け入れるの



です。弟子とは、キリストと同じように「自分の十字架を負って、日々主イエスの後に従う」者のことなのです。十字架を負う苦しみが、キリストを信じる者を一つにするのです。

また弟子とは、師(イエス)にとって大切なものを託すことのできる存在です。そして弟子とは、師(イエス)が大切にしたものを大切にしていける存在なのです。愛弟子は**イエスが愛したものを愛することでイエスとつながっているのです**。主イエスが「頭がおかしくなっている」という巷の噂にせき立てられて、イエスを捉えるためにやって来た家族を遠目に見ながら、自分の周囲で彼の話を聞いている人々を指して、主イエスは言われました。「**見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。 3:35 神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ**」(マルコ3:34-35)。教会とは主イエスが十字架で死ぬほどに愛した人が自分の横にいる空間なのです。恐れ多いことです。キリストの愛のゆえにこそ成立する共同体なのです。「愛する兄弟姉妹」とは、イエス・キリストが愛したがゆえに、わたしにとっても愛する存在となっているのです。弟子とは、師が大事なものを託

すことのできる存在であり、主**イエスが愛したものを愛することでイエス・キリストとつながっている存在だからです**。だからパウロは、キリスト・イエスを信じる者は、小さな違いを乗り越えて互いに一つとされるように願えというのです。ロマ書14章15節以下。

14:15 あなたの食べ物〔宗教的に食べてはならない食べ物〕について兄弟が心



を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません。食べ物によって兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。14:16 ですから、あなたがたにとって善いことがそしりの種にならないようにしなさい。14:17 神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。〔14:18 このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。〕14:19 だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。 祈りましょう。

2020.4.5 日本基督教団千歳丘教会